三浦梅園先生教訓要錄

忠孝の教

孝の道、臣たるものの義、君父の恩を報ぜんには衛生の道一日も忘るべからず、

忠孝の德別にあらず

夫、人の身體髮膚は、父母にうけたり、全うして返すは孝の道なり、君が一日の恩を感じ、我百年の身を獻するは、臣たる者の義なり。（養生訓）

人の道とは、只子としては孝に、臣としては忠なることにして、大史公の言にも、命泰山よりも重く、鴻毛よりも輕しとありて、君に仕るにも、親に仕るにも、命は只一つあるものなれば、尤大切なるものなり、常に衛生の道を知り、身を壯健に保たずんば父母には唯其病を憂へしめ、君の爲には、まさかの働もなるまじければ、百年の君恩も、何を以てか報ど奉らん、さる故に義に臨みての一命は、實に鴻毛よりも輕けれども、君父の恩を報せん心懸けは、只一命を泰山よりも重んずるにあり。（養生訓）

親につかふるを孝といひ君につかふるを忠とわかてども是も一通りの差別にして君は民の父母民は君の赤子四海一家と見るときは忠孝の德別にあらず忠とは己をつくすなりといへば違き樣なれども畢竟俗にいふ身をはむるなり身をはむるとはたとへばのがるる所なき路にて狼子などにせられたるが如し傍觀するものはあたらされどものがるる道なきものは死をおしまず身をかへり見ず人の勇怯といふも顧みざるとしばしばかへり見るとの間なり。（檢蹠錄）

立志の教

志たたざるさすがたの師をもとひべし、

身は賤しくとも志は高く、

世の人百年はいきはせず、どうなりともして過すがよしと思ふ人多し、皆志たたざるによる（梅園後拾葉）

人各業とする所あり、志すところあり、漁者は谷にはしり獵者は山にはしることなれば、己の志をつけさすがたの師をもとひべし、諸賢の志にしたがふべし。（塾制）

人は先志を立ると申が肝心にて、志すところはいろいろあるべく候へ共、先身はたとひ賤しくとも志は高く有たく候、今の碌碌の人にくらべて身を行はんには、行ひ易したる所とかく人並に候、まさかの時人君子の事どもよくききよくかんがへ、其人とたけくらべせんと心得べし、行ひ出したる事少しよければ、今のたれよりはまさる、誰よりはよしと思ふは志のひきよりも也、古の人、舜何人ぞといひしはこの事也。（奉公の道）

舜何人ぞといひしは、

一旦慨然として男子の志を立んとならば、自家情慾意智の態をよく探りわかち、意智を以て情慾にかたしひべし、ここにおいて大憤を發し大勇猛を以て是に繼くべし、其憤は、舜も人なり我も人なり、いかなれば我は碌碌の徒たるやと、日惜くおもふ事なりされども勇猛のこれに繼くものなければ、やがて退屈を生じ安をぬすむの心にくみしかるるなり、士不可以不弘毅任重而路遠仁以爲己任不亦重乎死而後已不亦遠乎といふもこれなり、毅とは俗にいふ精强きなり、重を荷ふ力は有ても、終日荷ひとやる精なければ、さきに荷ひし力も用たたず、孟子の浩然の氣を養ふといふもここの工夫なり、憤れば志立つ、毅もつて其志を遂るときは、情慾終に使命となる。（答西垣縫長）

廉恥の教

つらつらいきをしいけるものをみるに、親子の恩愛、雌雄の感想、生を惜み死を恐るるより、喜怒哀樂にいたるまで、人に具はるものは彼にろのふ、しかるに物に羞る心ばかりは、人より外になしと思はれ侍る、しかれば人間の禽獸にことなるものは、羞を知るより大なるはなし。（塾制）

憤れば志立つ、毅以て其志を遂ぐ、

鳥獸ははすかしきといふことをしらず、只人はかり恥かしきといふ事をしり候、然れば天より恥といふものをたもふは人ばかりに候、義は恥を種子として生じたるものに候、かかる大切のたまものをすて候は、かたちばかり人にて心は禽獸にて候半。（奉公の道）

恥を知るより大なるはなし、

義は恥を種子として生じたるもの、

無理無慈悲の利をこのみ、出入賣買には人と爭ひ、僥倖の仕合を己が手拍と鼻をあらし、人をは愚愚鈍

天理に背き行く末覺束なし、

奢侈の風は恐れても猶恐るべき事あり、

筋力の怠をいとふ古人、

惡衣惡食恥づべきにあらず、只恥づべきは、

學問は飯、學問の閥所、

我ころ知りつれと思ふ顏色、

人の規正たるべし、

手は奴、足は乘物よく使ふべし、

あちゐ樣になれる御馳走、

德を損はせ病を送る、

動くを好む氣、靜かるを好む身、

にて貧なる樣におもひ、侮るものも有、是一旦の榮耀にほこるとも、人ににくまれ天理に背き行くすへの程覺束なし。（梅園拾葉）

富貴奢侈の風行はれて人の生業をば賤しきものの樣に心得、人の妻は機織り衣縫ひ中饋の事に與るをば隱し、農夫は耕し草ぎり、商人は交易するをば、人目いぶせく思ふ樣なり、若しかあらば、士にして馬を馳せ、劍を試むるを恥ち僧にして看經を厭ふをも、よしと見るべしや、恐れても猶恐るべき風なり、されば天照太神も齊機殿にて神衣を織らせ給ひしころ傳へ侍れ、又近く織田信長は三十餘國を掌握せられし人なれども筋力の怠をいとひ、自ら米をうすつき給ひしとぞ承る、もろこしにても獨の先主は、久しく馬に乘らずして、股の肉肥たるを歎ヒ、晉の陶侃は百枚の瓦を、朝は門外に持出で暮には門內に運び入れしなど、かかる例は數多かることなり、しかあるほどに、孔子も道に志して惡衣惡食を恥るものは共に謀るに足らずとの給へり、衣惡しく食惡しきとて、なぜかは人に恥づべき、只孝として親に孝ならず、臣として君に忠ならず、女として操なく、吏として廉ならず、富で施す事能はず、貧ふしてまたなき志をもちなんこそ人の恥べき事ならめ。（養生訓）

修學の教

學問は飯と心得べし、腹にあくが爲なり、かけ物の樣に人に見せんとする爲にはあらず。

學問は閥所によりて善惡わかる、（梅園拾葉）

學文は修身の具也、さるを少し書籍を見侍れば子細らしく人にとき聞せ、我ころ知りつれとおもふ顏色にてほこれるがうるさく、淺ましく見ゆ侍れ、己れのみか人に惡まれあさけられ、終には禍をかふ媒とは成侍る、同列の人にあらずんば文學の話に及ふべからず。（塾制）

諸兄弟の言行中、人の規正たるべし、塾制違はすつとめ日々に新にし、おはれんで歎ひ、正してかたよらず、月經に其の成功を待べし。（塾制）

（雜）

勤勉の教

手は天より我に賜りたるやつ子にして、足は天より我に賜りたる乘物なり、其のやつ子を置き其乘物を棄て、一時の安をもとめ、人を苦しめて、己が安を求ひる故手足はありながら、終に手足の用もなさず。

交際饗應の心得

忠節と云ふ字、禮記の內に出たり、今の人の飲食の道、客は主人の食をしひ、酒をしいるを、主人の馳走とし、主人も客の機嫌にかのふを主とし、客酒すすめ、あらぬさまにおれるを、馳走と思ひいろある女子どもあつめ、酒より色をも、推うつり、人に德損はせ、己も德損なひて、厚き志なりと思ふ、若しさなき時は、賓主ともに無興なりと思ふなり、人に其德を損はしめ、人の氣血を破らせ人に病を送り、相共に歎ぶは、如何なる事にやあやし、昔陳敬仲、齊の桓公を饗せしに、日も暮れ猶興のありければ、燭をともして、夜飲をおさんと有しを、臣目を下して夜を下せずして、寢を徹せし事、美談として今に傳る事なり、云云。

養生の道

人の氣は、常に動くを好み人の身は常に靜なるを好めり、動くを好ひものは、靜なるを以て養ひ、靜なるを好ひ者には、常に勞を用ゆ、是養生の道なり。

先生の學、餘理は天地人三才に著き其規を發き、先生の德は日常身を以て之を教へ、時々の訓言多く傳る、今遺書により普通教育に於て熟讀玩味以て身を修ひ人倫の要を抄しとを江湖に頒ち記念とする。

校長　中島穆識

西武藏尋常高等小學校新築落成記念

（大正二年四月十六日）

國東　大正紀甲行